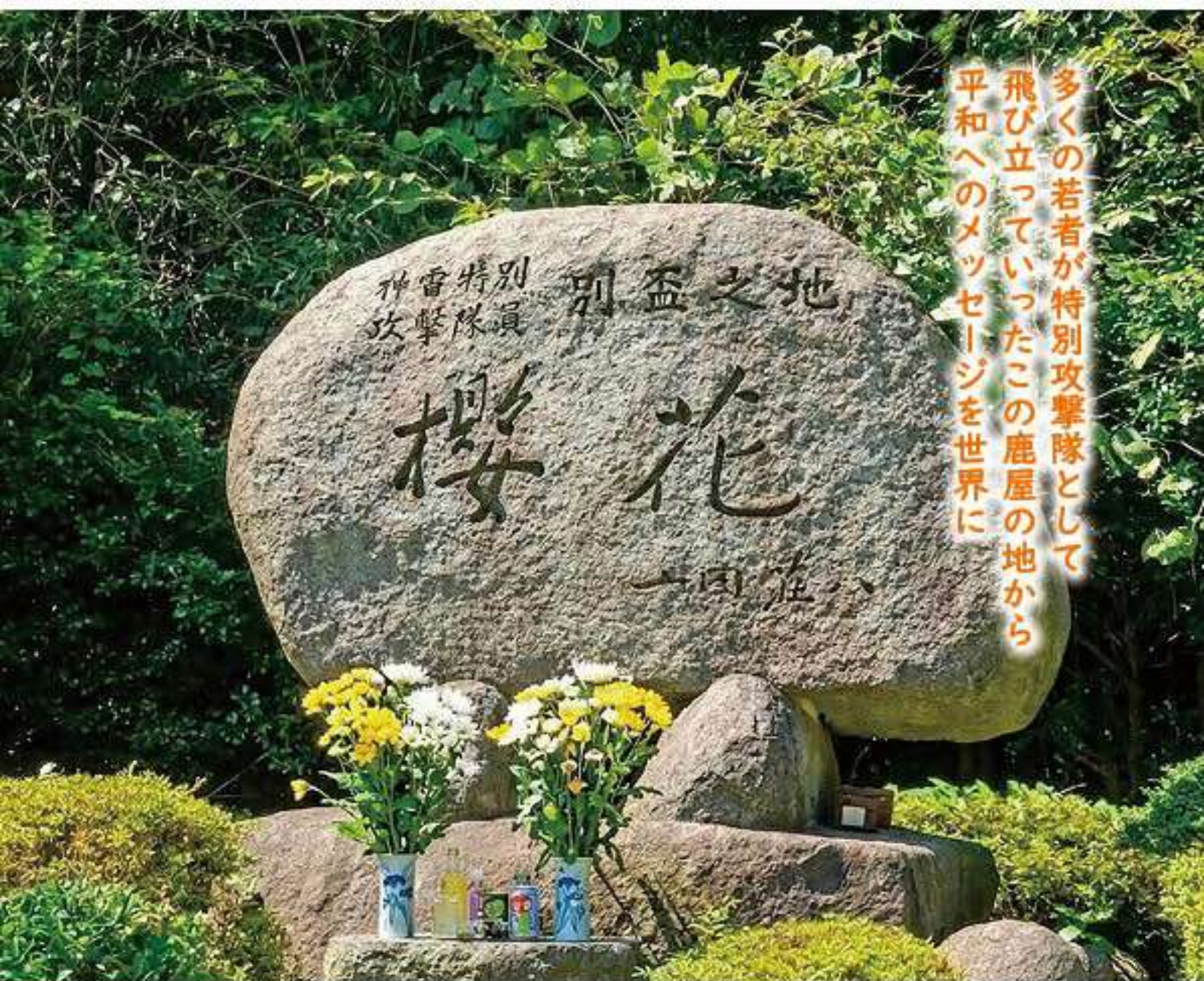


かのや未来創造プログラム

戦後80年 平和の花束2025



平和の花束実行委員会



永遠の平和を願って

戦後八十年 平和の花束2025

目次

○あいさつ 鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健作	2
○平和の花束2025開催内容	3
○「平和へのメッセージ」優秀作品 ・最優秀賞・優秀賞・特別賞受賞者一覧	6
・小学校5・6年生の部	7
・中学生の部	11
・高校生の部	15
・英語部門	19
○応募作品数・応募校	24
○講評 ・審査委員長 上谷 順三郎	25
○「平和へのメッセージ」スタジオ録音体験	27
○「平和について考える」 ・空へ還った若者たち	29
・無言の証言者たち	32
・「平和の花束」を未来へ	33
・特集「戦後八十年 平和の花束2025」	35
○鹿屋市の戦跡マップ	38
○空がなくなぐまち・ひとつづくり推進協議会	40

平和への思いを繋いで

鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健 作



太平洋戦争末期に、日本で最も多くの若者が特攻隊員として飛び立ったこの鹿屋の地から、平和へのメッセージを発信する「かのや未来創造プログラム 平和の花束」は、今年で第十二回を迎えました。戦後八十年目という節目のこの夏、約三百五十人の参加者の皆様と「戦後八十年 平和の花束 2025」セレモニーを執り行うことができました。オープニングアクトとして鹿屋女子高等学校音楽部のみなさんによる合唱、第一部では戦後八十年の節目の年として新設しました戦後八十年特別賞を含めて、優秀作品の授賞式及び最優秀作品の朗読を行いました。また、第二部「平和を考える」では、「戦争の記憶継承」をテーマとしたトークセッションと、慶應義塾大学文学部教授の安藤広道先生に「戦争とどう向き合うのか」皆さんといっしょに考える」と題した、講演をしていただきました。

今年度の「平和へのメッセージ」には、日本語と英語の二つの部門があり、県内外の小・中・高等学校及び台湾から四、二七三点ものメッセージが寄せられました。それらの作品には、児童生徒が戦争遺跡や戦争体験などに触れた体験を基に、平和や命について考えたこと、平和な未来を創るために今を生きる私たちにできることは何か、などについて自らの言葉で思いや願いが綴られておりました。児童生徒一人一人の真剣な平和へのメッセージに胸を打たれるとともに、ここ鹿屋の地へ平和への思いが寄せられていることに対し、改めて身の引き締まる思いがいたします。

私たちはこれからも、戦争の遺跡や体験、それらに基づく平和への思いを若い世代に繋いでいくと共に、平和へのメッセージをここ鹿屋の地から日本全国、そして世界へ発信し続けてまいります。

最後に、「平和の花束」の開催にあたって、「平和へのメッセージ」コンテストの審査や記念誌の発刊、及びMBCラジオでの収録バスツアーや朗読放送に御支援、御協力をいただきました多くの企業をはじめ、すべての皆様に厚く御礼を申し上げます。

かのや未来創造プログラム

戦後八十年

平和の花束2025

日時：令和7年8月8日（金）

会場：リナシティかのや3階

オープニング

○合唱

鹿屋市立鹿屋女子高等学校音楽部

「クスノキ」

「群青」



合唱

○主催者あいさつ

中野 健作



主催者あいさつ

第1部 平和へのメッセージ

■「平和へのメッセージ」

授賞式・朗読・講評

○授賞式

・最優秀賞

・優秀賞

・特別賞「空がなぐまち・ひとづくり推進協議会賞」

・戦後八十年特別賞

○「平和へのメッセージ」朗読【最優秀賞受賞者】

・小学校五・六年生の部 最優秀賞

鹿屋市立鹿屋小学校五年

迫田 乃愛さん

「見上げた空は同じでも」

・中学生の部 最優秀賞

鹿屋市立第一鹿屋中学校二年

小山 愛さん

「平和だから言える言葉」

・高校生の部 最優秀賞

学校法人津曲学園鹿児島高等学校三年

馬場 桐子さん

「語り継ぐ平和」



授賞式

・英語部門 最優秀賞

鹿屋市立甲良中学校二年 倉田 永遠さん

「What is War?」

・英語部門 (台湾の部) 最優秀賞

Gongheng Elementary School CHANG HSI-CHING 元2

「How Music Can Build a More Peaceful World」

※当日は朗読ビデオ放映

○講評

永里 護

(かのや未来創造プログラム

実行委員長)



講評

※審査委員長 上谷 順三郎 先生(鹿児島大学教授)
は荒天により来場不可

第2部 平和を考える

トークセッション (戦争の記憶継承)

パネリスト

安藤 広道 氏 (慶應義塾大学文学部教授)

※(荒天により来場不可) オンラインにて参加

立元 良三 氏 (戦争体験者)

淵田 るな さん(鹿屋市子ども平和学習ガイド)

小石田 蒼磨 さん(鹿屋市子ども平和学習ガイド)

上富 公輔 さん(鹿屋市子ども平和学習ガイド)

「戦争の記憶継承」をテーマに、戦争遺跡の研究者、戦争体験者及び三名の子ども平和学習ガイドという立場の違うパネリストによるトークセッションを行いました。

ガイドの子どもたちからの質問に対し、戦争体験者の立元氏は、学童動員での重労働や空襲の恐怖といった、戦時下の厳しい生活や軍国主義教育の経験を詳細に語ってくださいました。

また、研究者の安藤氏は、自身の研究が特攻作戦の中心地であった鹿屋の歴史の重要性へと発展していった経緯を説明し、単一の立場からではなく広い視野で戦争に向き合う必要性を強調されました。最後に、参加者は世代を超えて、戦争の記憶を次世代へ正確に伝え、平和について考え続けることの重要性を再確認し、セッションを締めくくりました。



講演

演題 「戦争とどう向き合うのか

～皆さんといっしょに考える～」

講師：慶應義塾大学文学部教授 安藤 広道 氏

※(荒天により来場不可) オンラインにて講演

戦争の歴史、特にアジア太平洋戦争には「唯一の正しい答えは存在しない」という主題を中心に慶應義塾大学の安藤広道氏が講演されました。戦争は、立場の違いによって用語や犠牲者数の認識に大きな差異が生じることを指摘されました。具体的には、特攻隊員の「国や家族を守りたい」という献身が、結果としてより甚大な犠牲につながったという悲劇的な側面があることなどです。

安藤氏は、平和を追求するためには自国の被害だけでなく、日本が侵略した側の視点や、アジア太平洋地域全体の広範な犠牲に目を向けることを伝えてくださいました。





平和へのメッセージ

優秀作品

■ 「戦後 80 年特別賞」「最優秀賞」「優秀賞」受賞者（日本語部門）

賞	学校名	学年	氏名 (敬称略)	題	
戦後 80 年特別賞	鹿屋市立 鹿屋小学校	5年	迫田 乃愛	見上げた空は同じでも	
小学校五・六年生の部	最優秀賞	鹿屋市立 鹿屋小学校	5年	迫田 乃愛	見上げた空は同じでも
	優秀賞	鹿屋市立 笠野原小学校	6年	柳崎 市花	祖父の言葉
	優秀賞	鹿屋市立 鶴峰小学校	5年	上拂 煌空	安心してサッカーができる世界に
	優秀賞	鹿屋市立 大始良小学校	6年	出口 めい咲	初じいちゃんの親指
中学生の部	最優秀賞	鹿屋市立 第一鹿屋中学校	2年	小山 愛	平和だから言える言葉
	優秀賞	鹿児島市立 鹿児島玉龍中学校	2年	倉岡 紗菜	小さな操縦席
	優秀賞	鹿屋市立 花岡中学校	1年	谷山 なつめ	記憶の中にとどめて
	優秀賞	鹿屋市立 大始良中学校	3年	牧 美乃莉	子供の心に平和を
高校生の部	最優秀賞	学校法人津曲学園 鹿児島高等学校	3年	馬場 桐子	語り継ぐ平和
	優秀賞	鹿屋市立 鹿屋女子高等学校	3年	木山 菜実	椿がつなぐ平和の記憶
	優秀賞	鹿屋市立 鹿屋女子高等学校	3年	山之内 心愛	「平和」の意味
	優秀賞	鹿児島県立 鹿屋高等学校	3年	藏ヶ崎 美月	「夢を桜花に乗せて」

■ 「最優秀賞」「優秀賞」受賞者（英語部門）

賞	学校名	学年	氏名	題
最優秀賞	鹿屋市立申良中学校	3年	倉田 永遠	What is War?
優秀賞	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	2年	三根 音空	To Solve Small Wars
優秀賞	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校	3年	中岳 花乃	Beautiful flower through All eternity
最優秀賞 (台湾の部)	Yilan County Luodong Township Gongjheng Elementary School	5年	CHANG HSI-CHING	How Music Can Build a More Peaceful World
優秀賞 (台湾の部)	Taipei Municipal Jing-mei Girls High School	10年	CHEN,SSU TUNG	A Peaceful Society

■ 特別賞「空がつなぐまち・ひとづくり推進協議会賞」受賞者

学校名	学年	氏名	題
大分県宇佐市立柳ヶ浦小学校	6年	石部 花純	戦争の跡は残すのが目的ではない
熊本県錦町立錦中学校	2年	川橋 茜音	平和の大切さを考える
兵庫県立北条高等学校	2年	永野 雄大	戦争遺跡のガイドをして

小学校五・六年生の部

最優秀賞

見上げた空は同じでも

鹿屋小学校 五年 迫 田 乃 愛

「あの日の空は今でも忘れない。」

私にはひいばあちゃんがいた。施設にいたころは、いつも周りにお友達がいて、歌が大好きで、おだやかに笑っている。私の顔を見ると、

「乃愛ちゃん、来てくれたとや。」

と、とても喜んでくれる。そんなひいばあちゃんだった。

ひいばあちゃんが亡くなったのは、私が五才のころ。いつも、しわしわの手で私の小さな手をやさしく包んでくれていたのに。私がお母さんに怒られた時も、私の味方になってくれたのに。一気にさびしくなって、たくさん泣いた。

そんなひいばあちゃんが、まだ元気だったころ、

「思い出すのは辛いけど、忘れちゃいけないことだから。」

と言つて、一度だけしてくれた戦争の話。まだ小さかった私には、よく意味が分からなかった。でも、いつもと違う、とても悲しそうな表情で話していたのを、今でも覚えている。

ひいばあちゃんの話、祖母にもう一度聞いてみることにした。あの時、ひいばあちゃんが言っていたのと似た気持ち。聞くのは怖いけれど、知らないといけない気がしたから。

その日、ひいばあちゃんが畑の手伝いをしてっていると、いつもは静かな町にサイレンが鳴りひびいた。空を見上げると、見慣れない飛行機が向こうから飛んでくるのが見えた。あわてて近くの防空ごうへ逃げると、さっきまでいた場所に、

「シュツ。シュツ。」

と、ばくだんのようなものが畑に突きささる音がした。怖くて耳をふさぐ人、泣き始める人、防空ごうの中は恐怖に包まれていたそうだ。こんな事は絶対にあつてはいけないのに。

テレビをつけると、ひいばあちゃんの話がまさに今、外国で起きている。大きなばくだんが建物に落ちて逃げる人、泣きながら何かをさげぶ人。もしこの光景を今、ひいばあちゃんが見たらどう思うのだろう。誰も見たくない世界がそこに広がっていた。

私はひいばあちゃんが亡くなった時、本当に悲しかった。悲しくて苦しくて、何日も元気が出なかった。この戦争でもたくさん人の命が失われたと聞いている。その亡くなった人、一人一人にも、きっと大切な人がいたはずなのに。その人を思っ

て泣いている人がたくさんいるはずなのに。

平和な世界を、私の小さな力で簡単に作ることはできない。でも、こんな私にでも出来る事はないかと考え、戦争のことを知り、二度とくり返さないと願うことはできるんだ。

ひいばあちゃんが私の手をやさしく包んでくれていたように、この世界にもやさしい気持ちがあふれますように。いつものきれいな空を見上げて、そう思った。

優秀賞

安心してサッカーができる世界に

鶴峰小学校 五年 上 拂 煌 空

ぼくの好きなことは、サッカーだ。ボールをけることが好きだ。きっかけは、いとこだ。いとこがサッカーを楽しそうにしているところを見て、始めた。

小学三年生のころ、チームに入った。今では、試合に出て、大会で優勝している。学校の校庭はすごく広い。でも、鶴峰小学校はたったの九人しかない。だから、ぼくたちだけのものだ。毎日、昼休みのサッカーにむ中になっている。

でも、カンボジアの人たちはちがう。ぼくたちの校庭と同じくらい広い草むらがあっても、中に入れない。赤いドロマークで、えい語で「危険」と書かれているのだ。なんで、サッカーができないのだろう。そう思って、本を読んでみると、「地雷」がうめられているようだ。初めて聞いた言葉だった。

そこで、ぼくは、「地雷のない世界へ」という絵本を図書室で借りた。

カンボジアでは、戦争のあいだに、たくさん地雷がうめられ、今も、四百万個から六百万個もの地雷が埋められているそうだ。

地雷をふんできずついたり、けがをしたりして、苦しむことがあるそうだ。こんなにも危ない地雷をとり除くときに、活やくするのは、犬である。犬が大活やくしているのに、ぼくには何か協力できることはないかと、調べてみた。すると、日本は、

カンボジアの地雷除去にもっとも多くのえん助をしていることがわかった。その活動の一つに、「百円キャンペーン」というものがある。一平方メートルあたり、百円で全ての地雷を取りのぞくことができる。五月に鶴峰小学校でもユニセフぼ金があった。そうむ委員会が、毎朝ぼ金のよびかけをしていた。

「ああ、今日もわすれた。」
とぼくは毎朝、そうむ委員会に伝えた。すると、
「明日かならずもってきてね。」

とそうむ委員会は答えた。そのときのぼくは、ぼ金の大切さを知らなかった。でも、百円でたくさん子どもたちが地雷のおそろしさからにげられると考えたら、もつとぼ金をしないといけないなと思った。

遠くはなれたカンボジアの問題ではあるけど、ぼくにできることはたくさんあるのだなと思った。ぼくのぼ金が、世界中の幸せにつながってほしい。



優秀賞

初じいちゃんの親指

大始良小学校 六年 出口 めい咲

「首都キーウなど各地で子どもを含む十二人が死亡——」今日も戦争のニュースが流れています。わたしは「小さな子どもまで犠牲になるなんて」とは思うけど、「自分とは関わりない出来事」とも思っていました。

今年のお正月、初めてひいじいちゃんの家に行きました。ひいじいちゃんの名前は初さんと言い、わたしが生まれる前に八十二歳で亡くなりました。仏だんに手を合わせ、初じいちゃんの遺影をながめてみると、となりにかぎってある人物が気になりました。その人はまだ若く、かわいらしい顔立ちをした男性でした。わたしの様子に気付いた母が教えてくれました。

「この人はね、初じいちゃんの弟の富士夫さんだよ。」
わたしは疑問を口にしました。

「なんでこんなに若いの。」
「少し重たい話になるけどね。富士夫さんは国を守るためと言って戦争に行き、十八才で亡くなったんだよ。二人のお母さん、ユキおばあちゃんは、富士夫さんが戦争で亡くなったことをとても悲しんでね。初じいちゃんまでもが兵隊にとられないよう、右手親指を切って戦争から守ったんだよ。」

わたしは、しよあげきを受けました。ユキおばあちゃんは、身体に障害がある人なら徴兵検査に合格しないだろうと考え、息子の親指を切り落としたのです。確かに利き手の親指がなけ

れば銃をにぎられません。でも、本当にそんなことが——。母は、

「茶碗を持つのも不便そうで痛々しかった。」と生前の初じいちゃんを思い出します。戦後、大工のとうりようになった初じいちゃんは、この話を一度きりしか語らなかつたそうです。

わたしの母にも二人の息子がいます。
「お母さんだったら、同じようにする。」

わたしはこわごと聞きました。母は、
「戦争で命を取られるくらいなら、指はなくても生きていてほしいと思うけど、実際に我が子の指を切れるかは分からない。」と苦しそうに答えました。わたしも同じです。

わたしの知っている「戦場での戦争」とは別の「戦場でない場所の戦争」があることを知りました。ユキおばあちゃんの決断によって、初じいちゃんは生き残り、命のバトンはわたしにつながっています。ユキおばあちゃんの遺影が光っているように感じました。

わたしはこの時代に生まれてきて幸せです。でも、戦争は世界中で続いています。ニュースを見ると、ウクライナやロシアの息子を持つ母親たちがユキおばあちゃんと同じような不安を感じていると分かるので胸が痛みます。

わたしは親指を見つめ、これからも精一杯生きようと誓います。そして、だれもが、親指を切るなんていう決断をしなくていいように、わたしにつながっている戦争の真実をたくさんの人に伝えていきたいと思っています。

中学生の部

最優秀賞

平和だから言える言葉

第一鹿屋中学校 二年 小山 愛

「行ってきます」

それは、いつもと変わらない朝のあいさつ。私は学校へ行くとき、必ずお母さんにそう言う。でも、昔はその一言がとても重い意味を持っていたことを私は知らなかった。

中学一年生の終わり、私は学校の授業で戦争について学んだ。戦争中、たくさんの人が家族に「行ってきます」を言って戦場へと向かった。きっとその中には、私と同じぐらいの子もいたと思う。行った先は、学校ではなくて、戦場。友達と笑顔で話せる場ではなくて、命をかけて戦う場所。

平和学習の日、ガイドさんが紹介してくれた話の中に、十六歳の若い兵士がいた。家を出る朝、お母さんに言った言葉だった。

「母さん、行って参ります」

それは、私の言った「行ってきます」よりももっと深い意味がある言葉だった。もしかしたら、もう二度と帰ってこられないかもしれない。そう思いながらも表情を変えずその言葉を言ったという。

その兵士は戦地から母に手紙を送っていた。ガイドさんが教えてくれた手紙の内容が私の心に残っている。「いままで自

分を元気に育ててくれてありがとう」や「母の子に産まれてよかった」そんなことが書かれていた。短い手紙だったが、その兵士のやさしき、母への強い思いが強く伝わってきた。そして、その手紙を最後に兵士は特攻機に乗り、帰ってくることはなかったそうだ。お母さんはずっとずっと自分の子の帰りを待ち続けた。心の中で「おかえり」と言いながら。

私はその話を聞いて涙が出そうになった。今、私が「行ってきます」と言っているとき、お母さんは「行ってらっしゃい」と笑ってくれる。そして、「ただいま」を言えば、「おかえり」と言ってくれる。そのあたりまえの日々が、どれほど大切でありがたいものなのか今まで考えたことはなかった。

戦争は、たくさんの命や家族の時間をうばってしまう。でも平和は、私のふつうの毎日を守ってくれる。「行ってきます」「ただいま」を笑顔で言える今が、どれぐらいありがたいことか知った。だからこそ、私は思う。けんかをしない。友達を思いやる。小さなことでも、平和を大切にすることができ。私にできることは小さいけれど、それも大切なことだと思う。そして、いつか私が大人になったとき、子供達が安心して「行ってきます」と言える世界を守りたい。そのために今の気持ち忘れられないようにしたい。



優秀賞

小さな操縦席

鹿児島玉龍中学校 二年 倉岡 紗菜

鹿児島県鹿屋市。九百八名もの特攻兵を送り出した地。そこには慰霊碑が建てられ、今も祈りが捧げられています。平和学習に興味があった私は鹿屋航空史料館を訪れました。写真や資料を見ても、戦争を経験したことのない私が何かを得られるだろうか。そんな不安がありました。しかし、いざ着いてみると実際の内部エンジンや航空母艦「赤城」の模型などに、あつという間に引き込まれ、さまざまな感情が次々と湧き上がってきました。

特に印象に残ったのは、実際の特攻に使われた大型戦闘機です。史料館の外に展示されているそれを見て、こんなに大きな戦闘機が日本の上空を当たり前のように飛び交っていたのかと想像すると不思議な気持ちになりました。史料館の奥にも、同じように戦闘機の展示があり、実際に操縦席の近くまで階段で登ることができました。両親の身長よりもずっと高いところまで登って覗き込んだ操縦席、そこは一人一人がやつと入れ替わらないのとても狭い空間でした。「命を賭けて乗り込むのだから、きつと広くて豪華なのだろう」そんな私の期待は、五〇センチ四方の心細さとともに見事に裏切られました。

ぼつかりと一人分空いた席、握られるのを待っているようなハンドル、古びた通信機器。その小さな操縦席は、ここに間違いない人がいたという事実を静かに語っているかのようでした。

た。密閉された操縦席から、敵の軍艦へ体当たりした人達の思いとは一体どのようなものだったのか。死を約束された操縦席から見えた空は、どのような空だったのか。家族や恋人は、彼らをどんな思いで見送ったのか。過去に思いを馳せてみて初めて特攻の残酷さと、一人の命が散る場所に関わってしまったことへの責任を感じました。人間の命を奪うためだけに飛ぶ大型戦闘機。これを動かしていたのは人間。やり場のない怒りと虚しさ。教科書で学んだ知識と、湧き上がってくる感情が重なり合った感覚は今も忘れられません。

遠いところから特攻の残酷さを嘆くのは簡単です。同時に「戦争＝悲しい過去」と結論づけてしまうことも簡単です。しかし、それでは表面をなぞっただけで、何も知らないことと同じだと私は思います。過去の悲劇から学ぶことは、今を生きる全ての人々の責任です。悲劇に対して無関心なままでは、はなく、覗き込んで、何かを得ようとするのが大切なのです。そうすることで初めて、知らなかった一面や先人達の想いに気づくことができます。

史料館の帰り際、私はもう一度、外の大規模戦闘機を見上げました。「私の身長からは見えないけれど、きつとこの戦闘機にも小さな操縦席があるんだろうな」そう思いながら、巨大な機体に不釣り合いなあの小さな操縦席が教えてくれた平和へのメッセージを、私はもう一度心に刻みました。

記憶の中にとどめて

花岡中学校 一年 谷 山 なつめ

対馬丸事件を知っているか。そう聞かれたら、私は知っているとはいえない。なぜなら今まで私は戦争のことを知りたいと思わず、対馬丸事件のことも知らずに過ごしてきたからだ。けれども、そんな私の戦争に対する考え方をねじ伏せられるような経験をした。

去年の夏、県立奄美少年自然の家主催の宿泊学習に参加した際、宇検村船越海岸の対馬丸慰霊碑前で、宇検集落の元区長で、慰霊碑建立を請願した一人である川渕哲二さんによる講話を聞く活動があった。この慰霊碑は、かつて宇検村に流れ着いた対馬丸事件の一部の生存者や亡くなった人達を思い、建てられたものらしい。蒸し蒸しとした暑い気温の中で、始まった講話。私は早く終わらないかなと思ひ、講話を聞いていた。しかし、話に耳を傾けてみると、強い衝撃を受けた。

一九四四年八月二十三日、沖繩から疎開する子ども達などを乗せて九州に向かっていた疎開船「対馬丸」。この日の午後十時十二分頃、鹿児島県の悪石島の沖合で米潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により、沈没した。七八四人の子どもを含む一四八四人が犠牲になった。乗船していた人々は、逃げる間もなく暗い海へと投げ出された。そこは、「七島灘」と呼ばれる流れの速い海域で、さらに、台風が接近して海は荒れ、高い波が漂流する人々を襲った。冷たい海水は体力を奪い、恐怖と寒

さで、意識が朦朧とする人もいた。それでも、島陰を目指して必死に泳ぎ続ける者、浮遊物にしがみつきながら救助を待つ者、それぞれの方法で生きようとした。しかし、漂流が長引くにつれ、体力は限界に達し、多くの命が海の藻屑へと消えていった。

川渕さんは炎天下の中、事実と思いを伝えようと身振り手振りを交えて分かりやすく一生懸命に説明してくださいました。私は、早く終わらないかな、なんで講話があるんだろう、と思っていた自分が情けなく、恥ずかしく思った。そこから真摯に話を聞こうと川渕さんの目を見て聞いた。当時、住民が懸命な救助活動を行ったこと。六日間漂流した人達が尿で喉の渇きをし、生き抜いたこと。川渕さんの表情は、犠牲になった人達にどれだけの困難があったかを絶対に伝えたい、という思いで溢れていた。最後に、

「このことを少しでも記憶の中にとどめてもらえたら。戦争は絶対にしてはいけない。平和な日本を引き継いでほしい。」と語られた。たったの三、四十分だったが、私には忘れられない時間になった。

対馬丸事件では、罪のない子ども達や一般市民が犠牲になった。これは現代の戦争でも言えることで、今私たちが、学んでいる間もどこかの国で多くの人が犠牲になっている。私たちができることは、講話などの平和への取り組みに積極的に参加し、事実を正しく知り、平和な社会を築いていくことだと思う。

子供の心に平和を

大始良中学校 三年 牧 美乃莉

日本で戦争は起こっていないが、果たしていまの日本は本当に平和だと言えるのだろうか。水道水はそのまま飲めるほど綺麗でご飯も美味しい。治安も良く、世界的に見ても長寿の国だ。

しかし、それだけで平和だと言えるのだろうか。多くの問題があるなかで、私は「少子化」について取り上げたい。なぜなら、SNSで、不幸な子供時代を過ごした大人の話を知って、少子化は単に子供が沢山生まれれば解決するものではないと感じたからだ。いまを生きている子供を幸せにすることが少子化の対策に繋がると思う。

児童相談所への相談件数は年々増加している。二〇二四年に厚生労働省が発表した小中高生の自殺者数は、五二九人と過去最多となった。これは私の通う学校の全校生徒の約三倍にあたる数である。これほど多くの子供が命を絶ってしまう日本はどこかおかしいと感じる。そして、自殺に至らなかったとしても、そうした辛い経験をした子供が大人になったとき、果たして子供を持ちたいと思えるだろうか。自殺の原因はいじめだけでは無い。家庭の問題が関係していることも決して少なくない。自分の親や他の親族から、死にたくなるような辛いことをされて育った人が、自分も親になりたいと思うだろうか。もし私がある立場なら、自分の子供にも同じようなことをしてしまうのではないかと怖くなる。実際に、虐待などから生まれる「負の

連鎖」は起きている。不幸な経験をした元子供から、また不幸な子供が生まれてしまう。そうした子供が増えていったとしても、日本は良くならないと思う。

子供を育てやすい環境づくりももちろん大切だが、子供を支える職業の人たちが安心して働ける仕組みや高い給与を用意してほしい。例えば、保育士の平均年収は約三九六万円だと言われている。子供の命を預かる責任の重さを考えると、とても安いと思う。また、教師の平均年収は約六六〇万円、働き始めの二〇代は約四〇〇万円程度となっており、保育士よりは高いものの、それでも仕事内容に見合っているとは言いがたい。こうした負担のしわ寄せは、少なからず子供にも影響しているのではないか。

世界の平和について考える前に、まず私たちの暮らす日本が平和なのか考えてほしい。少子化の背景には様々な問題がからみ合っていると思う。

平和な世の中を築くことは一朝一夕でできることではない。だから、次の時代を担う子供たちの心の平和と幸福が欠かせない。子供たちが、辛い思いをしなくてもいい。そんな世の中こそ平和ではないだろうか。

高校生の部

最優秀賞

語り継ぐ平和

鹿児島高等学校 三年 馬場 桐子

「戦争が起きている国の子どもたちにも、私と同じように夢がある。」

この言葉の意味を、私はニュースを見ながら初めて実感した。

二〇二二年二月二十四日。ロシアがウクライナへの侵攻を始めた日、私は自分の部屋で進路についての資料を眺めながら、未来について考えていた。そのときテレビから流れてきたのが、破壊された街と泣き叫ぶ人々の映像だった。同じ時間に、同じ地球のどこかで人が命を奪われている。私はその事実を、ただ黙って画面越しに見ていた。何気ない日常の中に流れる戦争の報道はまるで別世界の出来事のように映っていた。しかし、その瞬間、私の心には、一つの疑問が生まれた。なぜ、人は同じ人間に対してこれほどまでに残酷になれるのだろうか。

私は鹿屋市の海上自衛隊鹿屋航空基地史料館を訪れたことがある。そこには、第二次世界大戦中の特攻隊に関する資料が多く展示されていた。若い兵士たちの写真や遺書が並び、彼らがどんな想いで命を差し出したのかが、ひしひしと伝わってきた。自分が犠牲になることで、大切な人を

守れるのなら——そんな決意の裏には、本当は生きたかったという声がかたかに聞こえた気がした。誰もが傷つけたくて生まれてきたわけではない。それでも、争いはいつも若い命から未来を奪っていく。

二〇二五年三月二十八日、ミャンマーでマグニチュード七・七の大規模な地震が起きた。多くの人が家を失い、生活が一変した。戦争と同じように、「奪われた」のだ。しかし、その映像には別のものも映っていた。数多くの国から送られた支援物資。瓦礫の中で励まし合う人々の姿。名前も知らない誰かの手を取り、支え合う人々の姿がそこにあった。戦争と違い、災害には「敵」がない。だからこそ、人々は自然と助け合えるのかもしれない。もしそうなら、人間は「争う」より「支え合う」力の方が強いのではないだろうか。

戦争の映像と、鹿屋の史料館で見た若者たちの記録。そして、ミャンマーで支え合う人々の姿。どれも現実には起きたことで、どれも人間の姿だった。私たちは残酷にもなれるが、優しくもなれる。選ぶのは、私たち一人ひとりの心だ。

「戦争が起きている国の子どもたちにも、私と同じように夢がある。」

その夢は、誰かの手で壊されてはならない。平和は、遠い世界の話ではない。私たちの小さな優しきや思いやりが、世界を変えていくはずだ。戦争を知らない私たちがこそ、平和を語り継いでいかなければならない。

優秀賞

椿がつなぐ平和の記憶

鹿屋女子高等学校 三年 木山 菜実

私の祖父の家には戦時中、空襲によって焼けた椿の木が今も庭に残っています。八十年前の戦火を生き延びたその椿の木は、まるで一度焼けたとは思えないほど大きく成長し、今でも毎年花を咲かせています。私は今回、戦争を実際に体験した祖父や大叔父から実際に話を聞いたという母に戦争の話を聞きました。

私や祖父が住んでいる地域は海上自衛隊の航空基地から近く近くまであります。戦時中は飛行機が飛ぶための滑走路がすぐ近くの面影は全くありません。祖父の家は二階で養蚕をしており家が大きく、戦時中は海軍に接収され、家には海軍の将校さんが泊まっていたそうです。兵士の人たちはおなががすくと農家を回り食べ物を分けてもらっていたらしく、それが将校さんになれば怒られているところを祖父は見たことがあると話してくれました。家では兵士の人たちが宴を開いたこともあったそうです。祖父は、その兵士たちは特攻隊として旅立つ人たちであれは最後の宴だったのではないだろうかと話しました。特攻隊は敵に飛行機の機体ごと体当たりをする攻撃部隊だと昔から聞いていました。それに選ばれた人たちが祖父の家で最後の宴をしていたこと、それを聞いた時、戦争の記憶はひっそりと身近に残っていたのだと椿の木の話を聞いたとき同様驚

きました。

今年で戦後八十年、戦争を経験した人の数は少なくなり、私たちの世代はほとんど戦争のことを知りません。祖父の家にあ
る椿の木は「命の強さ」や「希望」を感じさせる一方で、戦争
の記憶が風化していく現実を物語っているようにも思えまし
た。戦争の記憶を言葉にして伝えること、書き記すこと、写真
に残すことが大切です。そのことをした人が私のすぐ近くにい
ました。大叔父です。大叔父は戦時中に戦争に行ったと母から
聞きました。戦後、庭師であった大叔父は祖父の家の庭をリ
フォームしました。本来であれば一度焼けてしまった木は切り
落としてしまいそうですが、庭にそのまま残したのは、大叔父
も戦争に行つてその現実を目の当たりにし、戦争のことを伝え
ていかなければならないと思ったからではないでしょうか。大
叔父の気持ちは今はもう知ることができませんが、椿の木を今
に残してくれたからこそ、私は戦時中に私の住む地域で起こつ
たことを知ることができました。同じ地域に住む人たちにも、
それ以外の人たちにもこれを通して多くのことを知る機会を
作ってほしいです。

優秀賞

「平和」の意味

鹿屋女子高等学校 三年 山之内 心 愛

「平和」の対義語を聞かれたら、多くの人は「戦争」と答えるだろう。

私の暮らす日本では、長い間戦争がなく、安全な生活が保たれている。しかし、日本に戦争がないからといって、全ての人々が平和の中に生きていくかといえれば、そうとは限らない。不安や孤独を感じながら日々を過ごしている人もいる。だから私は、「平和とは戦争がないこと」と単純に定義するのには、どこか違和感を覚える。

平和とは、本当に「争いが無い状態」だけでいいのだろうか。私は日々の生活の中で、「幸せだ」と感じられることがたくさんある。それは、将来に対して希望をもっているからだと思う。明るい未来を思い描けることや、困難に直面しても「きっと良くなる」と信じられる心の余裕。それが私の心の安定につながり、つまりは「平和」なのではないかと考えるようになった。将来に希望をもてること。たとえば今が苦しくても、前を向く心があること。そうした内面的な状態が、私にとっての平和なのだ。

このような「心の平和」は、衣食住が整い、命の危機が少なくないからこそもてるものかもしれない。世界には紛争や貧困の中で日々を生き抜いている人がたくさんいる。例えば戦争状態にある国では、学校に行くことも、水や食料を手に入

れることも難しい子供たちがいる。そうした地域では、まず「命の安全」が守られた状態、つまり戦争がないという物理的な平和が必要不可欠である。その基盤がなければ、将来への希望をもつことなど難しいだろう。

一方で、日本のように戦争がない国では、物質的な安心があるにもかかわらず、不安や孤独に悩む人が多い現実もある。社会の中で戦争が激しくなり、将来が見えにくくなることで、「心の平和」を失ってしまう人も少なくない。不安や孤独が多い社会だからこそ、自分の心の持ちようが大切だと思う。たしかに将来は不確かで、競争も多いけれど、それでも「自分がこうなりたい」とか「誰かの役に立ちたい」という気持ちがある限り、少しずつでも前に進めると私は信じている。戦争や災害がある中、誰かを助けたいとおにぎりを配る人や、妊婦や子供に布団を配る人、そのように支えてくれる人が身近にいて、小さな幸せを感じながら学びや挑戦を通して自分の可能性を広げていけることに希望を感じる。

つまり、日本においては、「心の平和」をどう保ち、育てていくかが私たちの大きな課題だと思う。だからこそ私は、自分自身にとっての「平和」とは何かを忘れずにいたい。どんな状況であっても、自分の未来に希望をもち、心の中に静けさや温かさを育てること。それが、私の考える「平和」であり、それがあからこそ私は「幸せだな」と感じられるのだと、改めて思っている。

「夢を桜花に乗せて」

鹿屋高等学校 三年 藏ヶ崎 美月

皆さんは「野里国民学校」を知っていますか。これは太平洋戦争末期、戦況が厳しくなった昭和二十年春頃から通称「人間爆弾」と呼ばれた特攻機「桜花」に乗って出撃をする人たちが生活していた宿舎です。そして鹿屋市の戦後八十周年事業の一つとして私が参加する舞台のモデルでもあります。

私は大隅の高校生がキャストを務めるミュージカル「ヒメとヒコ」に所属しています。そして先ほど説明した「野里国民学校」をモデルとした舞台にも出演する予定です。このような活動と勉強の両立は大変です。「ヒメとヒコ」の稽古は鹿屋で週三日、「野里国民学校」の稽古は鹿児島市内で週二日行われます。鹿児島市内から帰り着くのは夜十一時を過ぎますので、そこから勉強をするという生活です。そんな中、私が頑張れるのは送迎や経済的負担をしてくれる両親、悩みを聞いてくれる友人、応援してくれる先生方のお陰です。感謝の気持ちが私を前向きにしてくれます。

三年生になり、朝活、小テスト、予習復習や課題など、やらなければならないことが山程あります。先生方や先輩方がおっしゃるとおり一、二年でしつかりとした学習習慣や基礎力をつけておけばよかったですと後悔しています。やってもやっても勉強に終わりはありません。しかし、時間は有限です。私も市内の稽古に向かう移動時間に英単語を覚えたり、課題をやったりと

スキマ時間を大切にしています。精一杯やっているのですが、行きたい大学にいけるかどうかと心配になり不安と戦っています。私と同じように勉強や進路で悩みを抱えている高校生が沢山いると思います。しかし、このように悩めることは幸せなことです。八十年前、このような悩みをもつこともできずに命を失った多くの若者たちもいます。だからこそ自分の夢に正直になって、後悔する前に行動を起こし、挑戦することが一番大切です。

私は将来ミュージカル女優になりたいです。もし、皆さん自身や皆さんの周りに夢をもっている人がいたらお互いに背中を押して励まし合い、「桜花」に乗って命を捧げた若者たちの分まで、感謝の心をもちながら、夢を追い求めて欲しいと思います。

英語部門 ー 最優秀賞 ー

What is War ?

Kushira Middle School 3rd Grade
Kurata Towa

What do you think when you hear the word war?

I think there are people who have experienced it, people who know a lot about it, and people who don't really get it.

I didn't know much about the war to begin with.

When I was in elementary school, I heard that a war happened a long time ago.

At that time, I just know that something like this had happened in Japan.

Time passed and I was in sixth grade.

We went on a field trip to see the war sites.

At that time, I felt that war was happening around me. I felt like I was there when it happened.

I understood war more when I became a junior high school student. We went to the war site and the museum again. A guide came and explained every detail of the war.

At the museum, the museum staff gave us detailed information about what the items in the museum were used for.

After listening to these two people, I realized how tragic war is, and I began to think that war is not good and it will never be good.

I think wars started because of various things people did in the past, but I don't think there's any need to go out of your way to kill people and hurt their families and friends. I want to live my life thinking about the feelings of those who don't want war and don't want it to happen, and act accordingly.

倉田さんは、当初、戦争を「昔、日本で起きたこと」と漠然と捉えていましたが、小学6年生での戦跡見学や、中学生での史料館訪問、ガイドによる詳細な解説を通じ、その悲惨さを深く実感しました。この経験から、倉田さんは、戦争は決してよいものではなく、他者を傷つける必要はないと考えるようになりました。今後は戦争を望まない人々の思いを汲み取り、それに基づいた行動をしていきたいという倉田さんの決意が述べられています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門 – 優秀賞 –

To Solve Small Wars

Kanoya Girls' High School 2nd Grade
Mine Otoa

Few people can clearly answer the question: “Can we say that Japan is at peace today?” Japan is not at war with any other country and appears to be at peace. But is there truly no conflict within Japan?

I believe we can say that Japan is both at peace and not at peace. I call it “peaceful” because there are no wars with other countries involving guns or violence. But I also say it is “not peaceful” because a small war is happening inside Japan even now.

Small wars are conflicts that do not involve guns or physical weapons. In such wars, tools like words and pressure are used instead.

The schools where we spend our time are like battlefields. We cannot say that the only weapons there are academic or athletic abilities. Some people use violence to gain status. Others use words to bring someone down. Some apply pressure to make themselves appear stronger.

This kind of war is never one-on-one. Sometimes, it's many against one.

Have you ever heard of the angelfish? This species often divides into the many and the few. The majority unites against the minority and causes them to suffer. Once the minority disappears, the group splits again, and the same cycle continues-until it reaches its limit. This is a microcosm of Japanese society. People tend to unite only when they share a common enemy. Everyone knows how fragile this unity is, yet they still sacrifice one person to gain temporary peace of mind.

I do not believe this is true peace. Peace is when everyone around you can smile from the bottom of their hearts. If someone-whether it's another person or even yourself-is suffering, that cannot be called peace.

So I will not sacrifice anyone just to laugh. I want to say that both I and those around me are truly happy. I won't leave anyone behind.

I want school, our battlefield, to be a place where we fight only with our own strength, without hurting others. I never want it to become a place where violence, harsh words, or any other means are used to sacrifice someone.

However, even if our school changes, it doesn't mean that all of Japan or the world is at peace.

Peace becomes possible only when someone takes a small step forward with courage. The world is heading toward something new, and in that future, we must take care of each other and never abandon anyone.

I hope the world will become a place where not a single person is sacrificed.

三根さんは、日本には他国との戦争はないが、言葉や圧力を武器に誰かを犠牲にする「小さな戦争」が国内で起きていると述べています。学校も例外ではなく、集団で少数派を追い詰め、一時の安心を得る構図は日本社会の縮図であるとも考えています。三根さんは、誰かが苦しんでいる状態は真の平和ではなく、勇気ある一歩を踏み出し、誰も犠牲にせず全員が心から笑い合える世界を築くべきだと、自身の決意と共に訴えています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門 – 優秀賞 –

Beautiful flower through all eternity

Kagoshima Gyokuryu High school 3rd Grade
Nakadake Hanano

We must feel a sense of crisis. It was one morning, when I turned on the television, news about the war being broadcast almost every day.

While watching that, I was casually wondering if it would end soon.

Suddenly, the hands that were clearing the dishes came to stop.

It was because, I was shocked at myself. I started thinking about it as if it were someone else's problem. Watching television had become a habit, and I had gotten used to this unusual situation. I was embarrassed about myself. Last summer, when I turned 17. I participated in peace studies in Okinawa. I wanted to face the fact of war seriously in order to change myself. I have been interested in war since I was young, and I thought had already understood it. But it was not enough, what I saw in Okinawa was more painful and harsher than what I had expected. I have never been so emotionally shaken before. There is a place that particularly left an impression on my heart. It is the Himeyuri Peace Memorial Museum. Many documents describe girls' painful experiences, they who are almost the same age as they were sent to the battle field after undergoing training that can not be called medical.

The patients groaned in the narrow bed. After risking their life to cross the mountain to get food, they made some rice balls and offer it, they got insulted for it being too little. They wanted to escape and had a hard time. Reading the story, my eyes filled with tears, I didn't know the fact of the tragedy, sleepless nights, the guilt of their surviving while my old friends have fallen, and the suffocating smell of blood. Why did I feel so sad to read their story?

This feeling is what it feels like to be close to death.

Imagining their pain the haze that had been circling in my mind. These experiences made me realize that war is wrong, and at the same time, I decided my dream for the future. I want to continue to convey the thoughts of those girls in Okinawa to many people in my own words, They had to know things they didn't want to know. They couldn't live even if they wanted to live. There is still some strife in the world.

What can we do? It will be hard to take an action. But you can think of their pain as I do. My step alone may be small, but if each of us learns about that and shares our thoughts, we can make it a big step forward together. Will you help me?

中岳さんは、戦争を他人事のように感じていた自分を省み、沖縄で平和学習を行った際、ひめゆり平和祈念資料館で、戦場に送られた同世代の少女たちの凄惨な体験や死の苦しみを知り、深い衝撃を受けました。戦争の誤りを確信した中岳さんは、彼女たちの思いを自らの言葉で語り継ぐことを決意しました。中岳さんは最後に、一人の歩みは小さくとも、皆が痛みを共有し共に学ぶことが、平和への大きな一歩になると訴えています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門台湾の部 ー 最優秀賞 ー

How Music Can Build a More Peaceful World

Yilan County Luodong Township Gongjheng Elementary School Fifth grade
CHANG HSI-CHING

Peace means that people from different countries can live together with love and respect. I believe peace can grow through friendship, and friendship can quietly begin through music. I feel lucky that I've been learning how to play cello since I was nine years old. I also got the chance to be part of my school string orchestra and to join our international music exchange program. That's how I have a chance to find out music can touch people, bring out peace in their hearts, and make the world a better place.

The first time I went to Singapore for a music exchange, I was nervous and excited. I hugged my cello to help myself calm. When I played the first song, the room became very quiet. Then I heard clapping. At that moment, I understood music is not just sound. It's a way to connect hearts. We listened, waited, and smiled. That is when peace began.

In my school, I also joined the exchange event when the sister school from Japan visited. I was a student ambassador. I welcomed guests and showed them around my school. I also played my cello at the welcome party. The song connected us like a bridge. When I finished, I saw smiles on everyone's faces. I knew they felt the peace we shared through the music.

That day, I met a girl named Yumem Momoka. At first, we were both shy. She was really interested in my cello, so I let her touch it and try a few tones. With the melody, our friendship slowly developed. We couldn't speak the same language, so we used a translation app. We gave each other gifts and smiles. Even though our languages were different, music and true friendship brought us close.

At home, I also learn about peace from my father. He was a police officer. He told me his job was to keep people safe and protect peace in the community. During dinner, he told me stories about World War 1, World War 2, the 228 Incident in Taiwan. At that time, people lost their homes and families. Life became hard and unsafe. The pain stayed in their hearts forever. We also talked about the war between Ukraine and Russia. Every time I see broken buildings and homeless people on TV, I don't understand why people can't just live in peace and help each other to have happy lives. These stories make me feel sad, but also help me think. My dad says, "Peace doesn't come from weapons. It comes from understanding." I always remember his words.

Music and my family both teach me about peace. Peace to me is like a song, a smile, or a kind heart. I hope to make friends from around the world and use music to plant seeds of peace. Music may stop in one place, but it will play again somewhere else. Its message will always stay in our hearts.

チェロを奏でるチャンさんは、音楽を通じた国際交流により平和の尊さを学びました。シンガポールや日本の学生との交流では、音楽が言葉の壁を超えて心を繋ぎ、人々を笑顔にすることを実感しました。また、チャンさんは、警察官の父から過去の戦争の悲惨さについて聞いたり、平和は「相互理解」から生まれると教わったりしたことから、音楽と家族の教えを胸に、世界中に平和の種を蒔くことを願っています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門台湾の部 - 優秀賞 -

A Peaceful Society

Taipei Municipal Jing-mei Girls High School Grade 10
CHEN, SSU TUNG

The word "peace" is defined as harmony, calm, and freedom — opposite to conflict. There are different definitions that refer to different levels, such as personal peace, societal peace, and international peace. Among them, I would like to discuss "peace in society."

Wars, fights, and conflicts originate from human nature. People are born with desire and selfishness, striving to gain anything that benefits them. Because of humans' ambitious hearts, people fight with each other for the resources they desire, creating a society full of unease. Therefore, people must reach a consensus to keep society safe and comfortable.

To maintain a peaceful society, we need to put in a lot of effort — it doesn't come out of nowhere; it is built up over time and depends on shared consensus. People create rules to build a better society and establish common understanding, which includes laws and ethics. These concepts help educate people and maintain public interest through continuous revisions of the law. Through many experiences and conflicts, democratic institutions and the idea of people's rights have gradually emerged to help create a harmonious society. In order to ensure that everyone has equal rights and welfare, the government tries to make society as fair as possible. However, making everyone completely equal and satisfied is impossible. All they can do is narrow the equity gap — not eliminate it entirely.

To make society more orderly and peaceful, some civil society organizations have emerged to promote these concepts. For example, the "Taiwan Association for Human Rights" is one such organization that advocates for policies, education, freedom of speech, and indigenous rights. These efforts help strengthen peace in society and contribute to building a better community.

In conclusion, social peace is achieved through people's constant compromise and adaptation. Finally, I hope to further promote greater justice and fairness in the future to strengthen the foundation of peace. I look forward to a more peaceful society.

チェンさんは、平和とは調和や自由を意味するが、人間は本質的に利己的で資源を巡り争う傾向があるため、社会の平和を維持するには合意形成とルール作りが不可欠であると考えています。法や倫理、人権といった概念は、衝突の経験を経て発展するとともに、市民団体は権利の擁護を通じて平和に貢献していることを訴えています。チェンさんは最後に、社会の平和は、絶え間ない妥協と適応により達成されるものであることを伝えています。

平和の花束実行委員会による要約

平和へのメッセージ応募作品数・応募校

1 応募校・作品数

	応募校数 (校)	応募作品数 (点)
小学校 5・6年生の部	35	2,198
中学生の部	17	1,900
高校生の部	7	62
英語部門 (日本からの応募)	7	70
英語部門 (台湾からの応募)	3	43
計	69	4,273

2 応募校

(日本語部門)

【小学校】 (市内 23 校、県内 (鹿屋市は除く) 7 校、県外 5 校 合計 35 校)

鹿屋市立鹿屋小学校	鹿屋市立祓川小学校	鹿屋市立東原小学校
// 笠野原小学校	// 寿小学校	// 寿北小学校
// 田崎小学校	// 西原小学校	// 西原台小学校
// 花岡小学校	// 野里小学校	// 大始良小学校
// 南小学校	// 西俣小学校	// 高隈小学校
// 大黒小学校	// 輝北小学校	// 串良小学校
// 細山田小学校	// 上小原小学校	// 吾平小学校
// 鶴峰小学校	// 下名小学校	
鹿児島市立清水小学校	鹿児島市立大明丘小学校	指宿市立今泉小学校
出水市立野田小学校	龍郷町立秋名小学校	奄美市立朝日小学校
鹿児島大学教育学部附属小学校		
大分県宇佐市立八幡小学校	大分県宇佐市立駅館小学校	大分県宇佐市立四日市北小学校
大分県宇佐市立柳ヶ浦小学校	宮崎市立佐土原小学校	

【中学校】 (市内 12 校、県内 (鹿屋市は除く) 4 校、県外 1 校 合計 17 校)

鹿屋市立鹿屋中学校	鹿屋市立鹿屋東中学校	鹿屋市立第一鹿屋中学校
// 田崎中学校	// 大始良中学校	// 花岡中学校
// 高隈中学校	// 輝北中学校	// 串良中学校
// 細山田中学校	// 上小原中学校	// 吾平中学校
鹿児島市立東谷山中学校	鹿児島大学教育学部附属中学校	鹿児島市立玉龍中学校
南大隅町立根占中学校		
熊本県錦町立錦中学校		

【高等学校】 (市内 2 校、県内 (鹿屋市は除く) 4 校 県外 1 校 合計 7 校)

鹿屋市立鹿屋女子高等学校	鹿児島県立鹿屋高等学校	
学校法人津曲学園鹿児島高等学校	鹿児島県立松陽高等学校	鹿児島市立玉龍高等学校
鹿児島第一高等学校		
兵庫県立北条高等学校		

(英語部門)

【小・中・高】 (市内 3 校、県内 (鹿屋市は除く) 4 校、台湾 3 校 合計 10 校)

鹿屋市立串良中学校	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	鹿児島県立鹿屋高等学校
伊佐市立大口中央中学校	鹿児島市立玉龍中学校	鹿児島市立玉龍高等学校
鹿児島県立松陽高等学校		
N T U E E E S	G o n g j h e n g E S	J i n g - m e i H S

講評（日本語部門）

鹿児島大学教授 上谷 順三郎



【小学校5・6年生の部】迫田 乃愛さん 題名「見上げた空は同じでも」

乃愛さんが、今、見上げる空はいつものきれいな空なのに、大好きなひいばあちゃんには「今でも忘れられない」「あの日」の「空」があったということ、乃愛さんは知ることになります。それが、ひいばあちゃんが一度だけ話してくれた戦争の時の話でした。あのひいばあちゃんがとても悲しそうな表情だったこと、またその話をおばあちゃんからも聞くことで、「あの日の空」のことが乃愛さんの印象に強く残ります。

そして「今」また、外国で戦争が起こり、多くの人が命を失っている。ひいばあちゃんが亡くなった時の悲しさを思い出し、二度と戦争を繰り返さないと強く願う乃愛さんの思いがしっかりと伝わってくる作文です。

【中学生の部】小山 愛さん 題名「平和だから言える言葉」

平和だから言える、いつもと変わらない朝のあいさつの言葉、「行ってきます」。この言葉は、平和が私たちの普通の毎日を守ってくれるから言える言葉です。でも、昔、戦争だった時、こういった言葉の意味が違っていたということ、小山さんは学校の授業で知り、また平和学習の日にガイドさんの話を聞いてさらに考えることになりました。

戦争に向かう十六歳の兵士がお母さんに宛てた手紙に書いていた「行って参ります」が最後の別れの言葉となり、親子の間に「ただいま」と「おかえり」のやりとりがなかったこと。小山さんは、昔のような戦争があった頃に帰るのではなく、子どもたちが安心して「行ってきます」と言える世界を守りたい、と誓ったのでした。

【高校生部】馬場 桐子さん 題名「語り継ぐ平和」

馬場さんの作文では多くのことが語られています。短くコメントするために、私なりの読み取りを紹介します。

戦争を知らない私たちこそが、平和を語り継いでいかなければならないと馬場さんは作文の最後に書いています。子どもたちは夢をもつことができる。しかし、どこで生まれ、どこで生活しているか、その違いで、その夢が脅かされることがある。特に戦争は、例えばロシアによるウクライナ侵攻などでは、同じ人間を敵とすることで、その命を奪うという残酷な行いを招いている。だが、一方で、ミャンマーの地震では人々が助け合って支え合って生きている。こういった状況を見て知っている、日本にいる自分たちだからこそ、優しく支え合える人間であることを信じて、平和な世界を求めていくことを語り継いでいくべきだ、と馬場さんの作文から私は読み取りました。

◆◆日本語部門最終審査会 審査員◆◆

役職	委員名	備考
審査委員長	上谷 順三郎	鹿児島大学教育学部教授
委員	木場 志郎	南日本新聞社鹿屋総局長
委員	上木 勝憲	鹿屋市立鹿屋小学校長
委員	猪野 祐介	鹿屋市立南小学校長
委員	本田 博史	鹿屋市立鹿屋女子高等学校教頭
委員	川原 武敏	鹿屋市教育委員会指導主事

講 評 (英語部門)

鹿児島大学教授 上 谷 順三郎

【英語部門】倉田 永遠さん 題名「What is War?」

「戦争とは?」というタイトルです。戦争は英語で War。日本語の「戦争」、英語の War。言葉が違おうとそこにはかなり異なるイメージもありそうです。

倉田さんが、聞いたことはあつたけれども、戦争が身近に起こったことだと感じたのは小学校六年の戦争遺跡見学の時でした。そして戦争の現実を理解したのは中学生になって史料館で詳しい説明を聞いてからだったと書いています。

そのようにして戦争についての実感をもったことで、「戦争とは決してよいものではないし、これからもよいものにはなり得ない」と確信します。どんな理由があろうと戦争は肯定できないと考え、倉田さんはこの作文で、「戦争を望まない人たちの気持ち」を大切にすること、その思いを忘れずに行動することを誓っています。

【英語部門】(台湾の部) CHANG HSI-CHING さん 題名「How Music Can Build a More Peaceful World」

警察官のお父さんは、チャンさんに「平和は武器ではなく、理解から生まれる」と言ったそうです。戦争や歴史の話、平和の大切さもチャンさんは家族から学んだようです。また九歳から始めたチェロを通して、学校だけでなく国際的にも音楽を通して交流してきたことで、音楽が人の心をつなぎ、平和を生む力があると実感してきたようです。

音楽を通して世界中に友情の輪を広げ、平和の種をまいていきたいと考えているチャンさんは、平和を次のように定義します。平和とは、異なる国の人々が愛と敬意をもって共に生きること。

平和とは何か、私たちも自分でその定義を試みていくことが大事なのではないかとチャンさんの作文を読んで思いました。



◆◆ 英語部門最終審査会 審査員 ◆◆

役 職	委 員 名	備 考
委 員	有 馬 綾 一	大隅教育事務所主任指導主事
委 員	プレストン チョン ジュンジ	鹿屋市教育委員会 A L T
委 員	東 條 勇 希	鹿屋市教育委員会指導主事

「平和へのメッセージ」

スタジオ録音体験バスツアー

令和7年8月23日（土）に、平和へのメッセージ受賞者と鹿屋市内各学校の代表児童生徒が、MBC南日本放送ラジオスタジオ（鹿児島市）で、自らの朗読を収録しました。

実際にラジオ放送で使われているスタジオで、プロの指導を受ける大変貴重な体験となりました。

また、収録後は、黎明館（鹿児島市）で開催された「田中達也展 みたてのくみたて」を見学しました。

収録された平和へのメッセージを、是非お聞きください。



【平和へのメッセージをMBCラジオで放送】

「平和へのメッセージコンテスト」最優秀賞、鹿屋市内各小・中・高等学校代表者の平和へのメッセージを児童生徒自らの朗読で放送します。

☆ 放送期間：令和7年10月 ～ 令和8年7月

☆ 放送時間：毎週木曜日 12:55 ～ 13:00



「平和について考える」

空へ還った若者たち

無言の証言者たち

「平和の花束」を未来へ

特集 戦後八十年 平和の花束2025

空へ還った若者たち

— 鹿屋の空に刻まれた記憶 —

昭和 20 年、春、鹿屋航空基地は特攻作戦の最前線となっていた。
若き隊員たちは、どのような思いでこの空を見上げたのだろうか。



桜花を抱いて出撃直前の一式陸上攻撃機

鹿屋基地から出撃した神雷部隊の「桜花」

人間爆弾と呼ばれた「桜花」。桜花は単独で飛ぶことができないため、一式陸上攻撃機という攻撃機につり下げられた状態で飛行し、敵艦に近づいたときに切り離され、隊員によるコントロールで敵艦に突撃します。全重量の半分が爆弾（1,200kg）で、切り離されると、生きて帰れない十死零生の兵器でした。



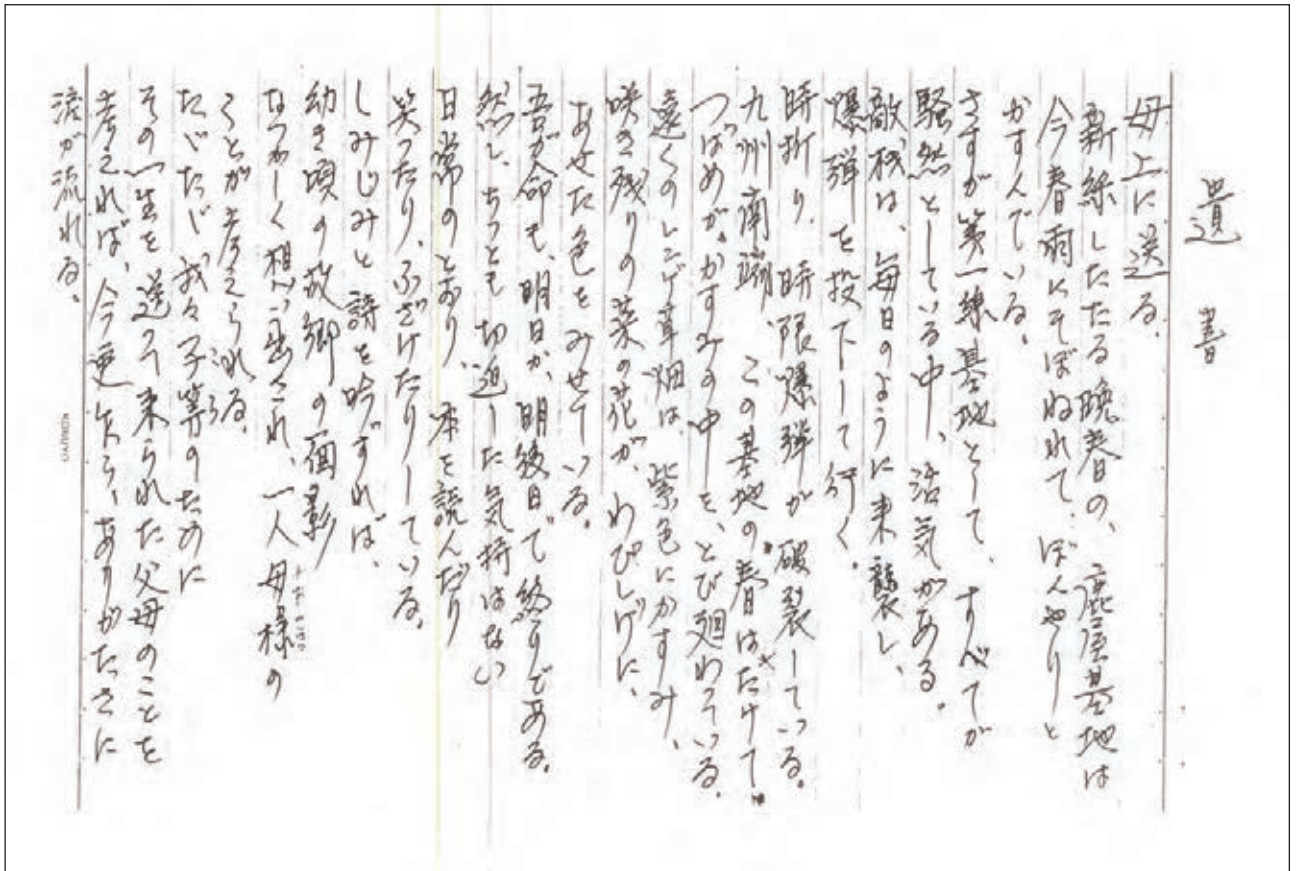
鹿屋基地を飛び立つ特別攻撃隊神雷部隊の一式陸上攻撃機

『特攻作戦』

主に太平洋戦争末期に、日本軍の巻き返しを図るため、航空機などで敵の戦艦に体当たりを行い、大きな損害を与える作戦です。鹿屋では、多くの有能な若者が出撃し鹿屋基地から九百八名が、串良基地から三百六十三名が出撃し、千二百七十一名の尊い命が失われました。

残された記録写真は、出撃直前直後の張り詰めた空気を今に伝えている。

若き隊員が残した遺書



(中略)

母上に送る

新緑したたる晩春の鹿屋基地は、今春雨にそばぬれて、ぼんやりと煙っている。さすがに第一線とて、すべてが騒然としている中に活気がある。B 29は毎日来襲し、爆弾を投下して行く。時限爆弾が時々破裂している。南国九州の春は長けてつばめが煙の中をとび廻っている。時々、破れたガラス窓から部屋の中にとびこんでくる。

遠くのレンゲ草畑は紫色にかすみ、咲き残りの菜の花がわびしげに合せた色を見せている。矢車草は庭前に雑然と咲き乱れている。雨の日、退屈をまぎらわす煙草の煙がくすぐったく若緑にまつわっている。吾が命も明日か明後日で終りである。

然し、ちつとも切迫した気持はない。日常の通りに読んだり笑ったりふざけたりしている。しみじみと詩を吟ずれば、幼き頃の故郷の面影なつかしく思ひ出されて、一人母様のことが考えられる。ただ我々子等の為に、その一生を送って来られた父母のことを考へれば、今更ながら有難さに涙があふれる。

(中略)

もう一度母上と一緒に肩を並べて
 歩いてみたいと思つて。母上も
 望みはもう合意してくれたい
 前達の代りに、苦勞された母上は、
 その報いませす、樂しみを見せず、
 散りゆくは、残念である。
 弟のこの望みを達成してくれれば、
 弟の望みである。素直に元氣で
 大きくなりてくれることを、只管望む。
 お母さん、私が散つた後、
 平和な樂しい家庭を築いて下さるよう
 私を靖国神社から祈つて下さる。
 この戦いにおいて、必ず敵を撃滅さ
 させるのですから、私が散つても、
 決してお悲しみにならぬ様、私は母上
 がたがよるこばれるのがうれしいの
 ですから大いにほめてやって下さい。
 呉々も御体を大切に祈ります。
 さようなら

母上様

連敬拜

もう一度、一緒に母上と歩いて見たい様な気がする。母上を安心さして上げたいという望みは、もうなくなってしまった。我等の為に苦勞して来られた母上にその報もせず、老後の楽しみも見せず、散りゆくのは残念である。俺の望みを達成してくれるのは弟である。素直に元氣で大きくなってくれることを只管望む。父の意志を貫徹してくれる様祈っている。

お母さん私が散つた後は、弟にたのんでやって下さい。平和な樂な家にすんでやって下さい。この戦に於いて必ず敵を撃滅させるのですから。私も靖国神社からそれを祈って居ります。私が散つても、決してお悲しみにならぬ様、私は母上がたがよるこばれるのがうれしいのですから大いにほめてやって下さい。呉々も御体を大切に祈ります。さようなら。

無言の証言者たち

— 鹿屋市に残る戦争遺跡 —



敵機から零戦を守った川東掩体壕

敵機の空襲等から飛行機を守るために作られた格納庫です。戦時中には零戦が入っていたと言われています。川東掩体壕は、コンクリート製で上に土を盛り、芝を植え、小山のように見せかけました。

八十年前の空は、
今の空と繋がっている。
あの日、飛び立った翼。
書き残された想い。
市内に残る数々の戦争遺跡。
そのすべてが、平和への道標。



特攻隊員の最期の通信を受信していた
串良基地跡地下壕第一電信室

串良基地から飛び立った特別攻撃隊員が突撃直前に送った最後の通信を受信していた地下壕です。部屋はコンクリート製で、大小2つの部分に区切られています。

セタセタセタ ツー 「我 戦艦に突入す」
クタクタクタ ツー 「我 駆逐艦に突入す」
ホタホタホタ ツー 「我 空母に突入す」



アメリカ軍の本土上陸に備えて造られた
高須トーチカ

トーチカとは、アメリカ軍の本土上陸に備えて造られた陣地のことで、コンクリート製のものや自然の地形を利用したものがあります。

高須のものは、自然石を利用し、錦江湾入口の南の方に向けた見張り窓が作られています。

鹿屋市内には、川東^{えんたいごう}掩体壕や串良基地跡地下壕第一電信室、高須トーチカなど、当時の激しさを物語る戦争遺跡が点在している。これらは単なるコンクリートの塊ではない。

かつて、ここで誰かが呼吸し、任務に就き、そして散っていった証なのである。このような今も残る戦争戦跡は、平和の尊さを無言にうちに語り続けている。

「平和の花束」を未来へ

—平和の尊さをいつまでも忘れないために—

戦争の記憶は、誰かが語り継がなければ消えてしまう。

私たちは、過去の悲劇を悼むだけでなく、そこから学び、平和の未来を創造する責任がある。

「かのや未来創造プログラム」は、平和の尊さと平和な未来を次の世代へと伝えていかなければならない。



平和の花束 2025 セレモニー
平和へのメッセージ朗読の様子



鹿屋市平和学習ガイドから串良基地跡地下壕
第一電信室について説明を受ける様子



鹿屋市子ども平和学習ガイドから
「桜花作戦」について説明を受ける様子



串良平和公園慰霊塔



鹿屋の地で生きる平和の
創り手として、事実と平和
への思いを未来へ繋ぐ。



小塚公園戦没者慰霊塔

◆参加者の感想

私が戦跡めぐりに行って感じたことは史料館の特攻兵 1人1人の写真を見たことによる疑問だった。なぜ特攻兵という死を間近で感じているはずなのにうつっているほとんどの兵達は笑っているのだろうか。写真だから笑っているのか。私だったら笑えない。特攻兵の恐怖を感じてみたと思うが、戦争は二度とくり返してはいけないから感じることはできない。肌で感じた方が確かに分かる。だから、それは、今もこれからも誰一人感じさせない、感じることをない平和な世界をつくらないといけない。私がこの戦跡めぐりで感じたことは相手に伝わりにくかったとしても、伝えたいといけないうことだ。肌で感じていたことも伝わるものは伝わるのだ。



永遠の平和を願って

どれも楽しく学ぶことができいい思い出になりました。中でも、特に史料館が印象に残っています。なぜなら史料館は戦争の時に実際に使っていたものがそのまま残っているのだからそれを見るたびに、「この服をどんな気持ちで着たんだろう。」とか、「このじゅうをどんな気持ちで着たんだろう。」と思ったからです。むねがいたくなりました。

ふたんは何気なく幸せに過ごす毎日だけど、こういう機会を通して、昔の人たちが作ってくれた平和な日常に、感謝しようと思改めて思いました。

今度は家族で戦跡めぐりをして、私がいざいと教えたいです。ありがとうございました。



永遠の平和を願って

特集

戦後80年 平和の花束2025

戦後80年の節目の年、「戦争の記憶継承」をテーマに様々な取組を行いました。その取組の一部を紹介します。

「平和へのメッセージ」戦跡バスツアー

- ◆開催日 令和7年7月23日（水）
- ◆目的 鹿屋市に残る戦跡を実際に見ることを通して、当時の様子に思いを馳せるとともに、世界の平和を願う気持ちを高める。
- ◆参加者 平和へのメッセージ受賞者及び市内各学校代表者



◆パネリストの思い



戦争体験者
立元 良三 氏

- ・ 戦争が始まると、特に食べ物や衣料品、履物などが不足し、小学校6年生の時には裸足で通学していた。
- ・ 当時の日本は神様の国であり、戦争には必ず勝つと教えられていた。教科書はなく、満足に授業を受けられなかった。
- ・ 夏休みには、水や食料が満足にない中、背中に山かごを担いで20km歩き、荒れた土地を開墾する作業があった。
- ・ 高須の町に250kg爆弾が42発も投下された。防空壕に避難したが、爆音と振動で土砂が落ちてきて、生き埋めになるのではないかと思った。
- ・ 当時は、国のために命を捨てる特攻隊員に誰もが憧れていた。特攻隊員は、白の飛行服に白のマフラーを付け、大変かっこよく見えたが、翌日には命を失う運命にあったにもかかわらず、悲壮な気持ちは全く感じられなかった。



研究者
安藤 広道 氏

- ・ 鹿屋という場所は、特攻作戦だけでなくアジア太平洋戦争全体において、とても重要な役割を果たしてきた地域である。
- ・ 鹿屋や日本といった自分たちの立場からだけでなく、戦争をしていた、あるいは戦場となってしまった各地や各国の立場だったら、この戦争がどう見えるかを想像しながら、広い視野で戦争に向き合ってほしい。
- ・ 戦争は分からないことばかりで結論を出せないことや意見が分かれていることが多い。無理に答えを出す必要はなく、「分からないことは分からない」と言って、悩むことを大切にしてほしい。
- ・ ガイドの発表を聞き、彼らが鹿屋の戦争遺跡や戦争について熱心に学び、様々なことを感じていることが伝わってきて、とても嬉しく頼もしく思う。



鹿屋市子ども平和学習ガイド

- ・ 記念碑を立てたり、戦争の記録を未来につなげたりしようとするお二人の行動の熱量のすごさが伝わってきた。
- ・ 戦時中、戦後の混乱について多角的に理解し、その体験を次の世代に継承することの重要性を認識した。
- ・ 平和学習ガイドが先頭に立って、伝えることができるように努力したい。

思いは、一つ

戦争を体験した者。その歴史を研究する者。
そして、未来へ継承する若者たち。

立場は違っても、全員の思いは一つ。戦争の事実を現在、そして未来へと伝え、つないでいくこと。



永遠の平和を願って

平和の花束 2025 トークセッション

- ◆開催日 令和7年8月8日（金）
- ◆目的 若い世代が戦争の歴史を理解し、未来に向けて一人一人が平和について考えるきっかけにする。
- ◆パネリスト
 - 安藤 弘道 氏（慶應義塾大学文学部教授）
 - 立元 良三 氏（戦争体験者 93歳）
 - 淵田 るな さん（子ども平和学習ガイド 鹿児島第一高等学校1年）
 - 小石田蒼磨 さん（子ども平和学習ガイド 鹿屋中央高等学校1年）
 - 上富 公輔 さん（子ども平和学習ガイド 田崎小学校6年）

 <p>上富 公輔 さん</p>	<p>子ども平和学習ガイドになろうと思ったきっかけ</p> <p>5年生の時の遠足で史料館に行き、特攻隊の存在を知った。それがきっかけで戦争に興味をもち、色々な人に戦争のことや戦跡についてガイドをしたいと思った。</p> <hr/> <p>印象に残っている鹿屋の戦跡</p> <p>「桜花の碑」</p> <p>特攻作戦に使われた人間爆弾と呼ばれた兵器である「桜花」により亡くなった人々を思う関係者が石碑を立て、山岡荘八さんが石碑の文字を書いた。</p> 
 <p>淵田 るな さん</p>	<p>子ども平和学習ガイドになろうと思ったきっかけ</p> <p>小学校の頃、自由研究で県内の戦跡を調べ、鹿屋市に多くの戦跡が残っていることや平和学習の存在を知った。</p> <hr/> <p>印象に残っている鹿屋の戦跡</p> <p>「串良平和公園慰霊塔」</p> <p>塔の上には、平和の象徴である鳩が特攻隊が飛び立っていった沖縄の方向を向いて飾られている。塔の近くで手を叩くと鳩の鳴き声が聞こえるため、訪れる機会があれば試してみたい。</p> 
 <p>小石田 蒼磨 さん</p>	<p>子ども平和学習ガイドになろうと思ったきっかけ</p> <p>「宇宙戦艦ヤマト」に興味をもったこともあるが、映画「永遠のゼロ」の話から鹿屋の戦争の歴史を調べ、悲しい歴史があることを知った。その歴史について知らない同級生が多く、戦争の記憶の風化を感じたため、一人でも多くの人に知ってもらいたいと思った。</p> <hr/> <p>印象に残っている鹿屋の戦跡</p> <p>「串良基地跡地下壕第一電信室」</p> <p>特攻で飛び立った隊員が送ったモルス信号を受信する場所だった。モルス信号の音を聞くと、この場所がどれほど悲しいことや思いがあったことを思い起こすことができる場所である。</p> 



ついらくちてんひ
B29 墜落地点の碑



くしらへいわごうえんいれいとう
串良平和公園慰霊塔



ちかごうだいいちでんしんしつ
地下壕第一電信室



きゅうだんやくこだんこんあと
旧弾薬庫弾痕跡



かわひがしえんたいごう
川東掩体壕



鹿屋市の戦跡MAP

かの や こう くう き ち し り ょ う か ん
鹿屋航空基地史料館

せん ぼつ しや い れい とう
戦没者慰霊塔
こづか こう えん
(小塚公園)



おう か ひ
桜花の碑



しん ちゅう ぐん じょう りく ち ひ
進駐軍上陸地の碑



たか す あと
高須町のトーチカ跡



HYOGO
KASAI



KAGOSHIMA
KANOYA

あの空と つながる、 まちひと平和。

平和を願う交流の物語

HYOGO
HIMEJI



OITA
USA



KUMAMOTO
NISHIKI



空がつなぐ
まち・ひとづくり
推進協議会

戦時中に空でつながった、 地域の新たな交流。

太平洋戦争末期、加西市にあった姫路海軍航空隊、そして宇佐市にあった宇佐海軍航空隊では特別攻撃隊が編成され、若い隊員たちは集結した鹿屋市の基地から各地の若者とともに沖縄方面へ出撃していったのです。そんな旧海軍飛行場ゆかりの地として空でつながる地域が、未来に向けて平和ツーリズム普及のための事業を行っています。



公式サイト

空がつなぐまち・ひとづくり推進協議会 事務局・兵庫県 加西市 TEL:0790-42-8700 FAX:0790-43-1800

鹿屋・大隅

学校に仕事にと頑張っている
皆さん
車やトラック、趣味でバイク
の免許取得してみませんか？



寿 鹿屋 自動車学校

まずご相談を。☎0994-43-2627

Honda Cars 鹿児島東

[鹿屋中央店] 鹿屋市笠之原町2038-1

TEL (0994) 43-4193

[志布志店] 志布志市志布志町安楽2027-1

TEL (099) 472-4590

世界に平和を、子どもたちに愛を！
文具・事務用品・教材・家具・コピー機・OA 機器

 株式会社 六宝堂

〒893-0064 鹿児島県鹿屋市西原4丁目10番20号

電話番号 ▶ 0994-43-5626

FAX 番号 ▶ 0994-43-5646



有限会社 カリヤ

・居宅介護支援事業所
(・YS マリ化粧品)

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5039 番地 31
TEL(0994)**36-8800** FAX(0994)**42-0895**

グループホーム 愛

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5039 番地 8
TEL(0994)**40-6100** FAX(0994)**40-6111**

デイサービスセンター 愛乃家

・住宅型有料老人ホーム

愛

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5030 番地 2
TEL(0994)**43-6666** FAX(0994)**41-0086**

債務整理

離婚

相続

遺言

早川法律事務所

交通事故

一般法律相談

(平日) 午前 9 時～午後 5 時 30 分
法律扶助制度を利用した無料相談実施しております。
☎0994-45-6000 FAX0994-45-6001
〒893-0011 鹿屋市打馬 2 丁目 2 番 27 号





鹿屋寿店 ☎0994-43-3505

東開店 ☎099-268-2200

まっすぐ、正直に。
大湊酒造株式会社

鹿屋市白崎町21番1号

TEL.0994-44-2190

お気軽にご相談ください。

保険調剤・漢方相談 オガワ薬局

鹿屋市新川町132-1 TEL 41-3003 FAX 41-3009

健康で楽しい食生活



三本サキ

- ◆旭原店 ◆東串良店 ◆串間店
- ◆川西店 ◆高山店
- ◆西原店 ◆有明店

チラシ情報
やイベント
情報を配信
しています!



素材にこだわる

焼肉こだわり館

鹿児島県鹿屋市札元2丁目3685-9

電話 0994-41-0081



電気工事

株式会社
UTO 宇都電設

TEL.0994-42-5855

鹿児島県鹿屋市白崎町18-35



UTO SINCE
1982
ELECTRICAL
CONSTRUCTION CO., LTD.